



法学部カフェの 影武者たち

退職者カフェ

「ゼミは楽しかった」

小林 資郎 先生



Shiro Kobayashi

昭和48年4月に赴任してから42年が経った。退職にあたり、教員生活を振り返って何か書き残しておきたいことをとの依頼であるが、当時の状況を思い出すことがかなり困難になるような時の経過である。ただゼミナールにおける学生との触れあいは遠い昔のことであればある程、明確に記憶している。

民法のゼミだったので、財産法をめぐる事例問題や最高裁判例を素材として、学生の論理的思考能力を養うことに主眼をおいた筈であるが、その成果が十分に現れたかどうかは定かではない。ゼミの内容はもはや記憶には殆ど残っていない。ただ、学生との課外でのつきあいは鮮明に思い出すことができる。ゼミが終わってすすきのに繰り出したことも再三であったし、夏休みにはゼミ合宿と称して温泉やキャンプ場に赴き、夜を徹して酒を酌み交わしながら、法律の話に止まらず社会情勢や人生論について大いに盛り上がったものである。思えば、赴任当時はまだ30歳前であり、学生との年齢差は一桁だったので、学生も友達気分で接してくれたし、私もそのように対応できたのである。

女子学生の数が増えるにつれ、私のゼミにも女子学生が参加するようになってきた。ゼミ以外の交流の場が多くなり、ゼミ生同士が結ばれる例が少なくなかった。4組の媒酌人を務めた。その夫婦が子供を連れて会いに来てくれるのは何とも嬉しいものである。

法科大学院の教員を兼務するようになり、法学部のゼミの担当からはずれて久しい。寂しい気もするが、自分の年齢や巷間言われるところの学生気質の変化を考えると、嘗てのように活気あるゼミ生活をリードする自信はない。まさしく去るべき時期なのであろう。

「だめ教師」最後の弁

田口 晃 先生



Akira Taguchi

10年程、政治学入門と比較政治学を担当してきました。そこで政治に関する知識や見方を紹介することを通じて、学生の皆さんひとりひとりが自分の「政治地図」を作る手助けをしてきたつもりです。私にとって教育とは、教師が「正解」を学生に伝え、学生はそれを覚えこむという一方的過程と全く違うものです。「入門」講義の冒頭で毎年述べているように、大学での学問とは、一義的な正解のない世界です。試験制度に対応して人工的に作られた所謂「正解」とはお別れして、様々な見方・捉え方を自分で確かめ、一人ひとりが自分のペースで知的に成長し、それを教師が脇から支援する。最近では教育学でイエナ方式として知られ、実は大学院ではすでに実行されているこうした方法が私の考える教育です。その場合、かなり早い段階から、疑いながら自分で考え・判断する練習を積むことが重要ですが、残念ながら日本の初等・中等教育ではその点が軽視されてきたと言わざるをえません。「正解」に早くたどりつくのが「秀才」であり、疑っている間は時間がかかるのです。「原発は安全」という「正解」を刷り込まれて

きた人たちは、同時に疑うこと自体が望ましくないと教育されてきたのではないのでしょうか。「正解」として教わったこと以外を差別的に排除するのではなく、自分も含めて疑う、そうしてそこから生じる善意を大切に思うところから「寛容」の精神が生まれると古人は教えています。試行錯誤と疑いが成熟にとって不可欠なのです。そうして各人が自分なりの「政治地図」を作り、政治や社会について様々な人と話し合いながら判断して行けば、成熟した民主主義も夢ではなくなるのではないかな。こんなことを考えながら教師を勤めて来ました。けれども、人前で話したりパフォーマンスしたりが子供の時から大嫌いな私は、結局教育技術において拙劣な「だめ教師」であった、と退任に際して最後の最後に認めざるを得ません。それでも、懷疑と試行錯誤を大切に生きようという私の意図は何人かの方には伝わっているだろうと信じてはいます。

反省しない 講義はなかった！

千葉 卓 先生



Taku Chiba

私が本学部に着任したのは1972年4月であつた。その時一緒に採用されたのは私を含め3名だったことから、何故か周囲から三バカトリオとも呼ばれたのだつた。

その三バカは、着任後間もなく、我々は単に研究面で高い評価を受けるだけではなく、教育面でも一流になろうと話し合っていた。その時私は、10年も経験を積めば教育面で一流になれるものと勝手に思い込んでいたが、それが甘い考えであつたことは10年経った段階で思い知らされた。教育面でこうなっていくであろうと予想していたことがことごとく達成されなかったからである。

そこで、どうしたものかと思案していたちようどそのころ、北大を退任して本学部にくられたK教授から講義のしかたを教わる機会を得た。その中で私は特に、「毎回講義が終わった後に反省点をメモしている」という言葉に強い感銘を受けるところとなった。学生から極めて評価の高い講義をしておられる先生にして、このような努力を怠っていないことを知ったからである。

それ以来、私は、ワラをも掴む思いで、講義の度毎に反省点をメモするようになった。すると、しばらくは変化を感じ取ることはできなかったが、二年後位から、その効果が表れ始め、五年後には受講生が講義に対してかなり熱心に聞こうとする姿勢を持ってくれていることが感じられるようになった。そこで、幾らか講義に自信を持てるようになった私は、その後も反省点をメモすることは続けつつ、反省メモに基づき、学生全体の表情を把握しながら講義をする方法を模索し始めた。その結果、まず教壇を降りて話をするようにし、次には教室内を歩き回るようにし、更には質問をするように心がけ、そして対話を試みるといった講義も行う方向へと進めることとなった。これにより、今では、かなりの程度学生全体にわかつて貰える講義ができるようになったのではないかと考えている。

といっても、今だに、講義の度毎に反省点をメモ帳に加えられていることには変わりがない。この分では、反省しなくても良くなるのは、講義をしなくなった日からということになるのでしょうかね、K教授！

欲しい余裕 — 教養のすすめ

松田 光一 先生



Koichi Matsuda

旧教養部の改組転換に伴って法学部へ所属してからはや16年の歳月が過ぎようとしています。同時にこの3月で43年にわたる教員生活に終止符を打ちますが、大過なく過ごすことができたことに安堵し、加えて最後が法学部であったことに感謝しています。

私の世代は団塊世代の少し前で日本の戦後復興と高度経済成長の真っ只中で育ち、右肩上がりの社会を経験してきました。戦後の食糧難や社会インフラの貧しい時期の経験もしましたが、努力をすればそれなりに報われる、昨日より今日、今日より明日へと確実に希望が持てた時代でありました。

戦後の高度経済成長は労働市場を活性化させ、人材供給の場である高等教育機関を拡大させました。その結果、大量に卒業生が生み出されていくことになりましたが、現在のような就職難が社会問題になることはありませんでした。今の学生・院生に比較すると非常に恵まれた環境だったと思います。そのため各自が興味・関心のある分野にどっぷり浸かっていられる余裕があり、それが人間形成にとって大きな意味を

もっていたと思っています。最近の就職事情の厳しさは受かるための受験技術的な対策も含め準備に相当の時間を要するので、本来学生時代に身に付けておかねばならない教養的な素養が弱体化していることが気がかりです。すぐに役立つかどうか分からない教養の取得にもっと時間を割いてもらいたいと願い、それが就職する際の大きな力にもなると思う昨今です。

撮影協力



椿サロン 札幌本店
札幌市中央区北7条西19丁目
momijiビル
Tel・Fax / 011-215-4444



法学部カフェの 影武者たち

——全26回の軌跡——

松本いづみさん

法学部3年生

吉田キミコさん

画家・東京都在住

白鳥 健志さん

札幌駅前通まちづくり会社取締役・
工学部卒業生

伊藤也寸志さん

写真家・法学部卒業生

蝶野 岳陽さん

路子さん 夫妻

カフェ・エストラダ店主

坂井 洋介さん

釧路市役所勤務・法学部卒業生

三浦 裕幸さん

法学部事務室・工学部卒業生

2011年の6月に「開店」した「法学部カフェ」ですが、その後、順調に開催回数を重ね、直近の回(2013年12月カフェ「市民が守る平和」)が26回目となりました。これも一重に、あらゆるかたちでカフェ実現に関わっていただいた方々のお蔭です。本当にありがとうございました。ここでは、全26回の記録を写真の一コマ一コマで紹介すると同時に、いわば「法学部カフェの影武者」(通称「カフェ武者」?)とも呼ぶべき方々の横顔を、本誌面では7名分だけ紹介させていただきます。

ここから分かるのは、法学部関係者であるとないとに関わらず、実に沢山の方々の協力や協賛があって法学部カフェは成り立っている、というまぎれもない事実です。本学部の在校生・卒業生が一番の主力である「カフェ武者」ですが、他にも大学裏の(リアルな)カフェの店主夫妻から、東京在住の画家に至るまで、実に様々な方々の支えがあつての法学部カフェということの一端がお分かりいただけるかと思います。「カフェ武者」の皆様には今後とも倍旧のお力添えをいただきたく思いますし、春以降に再開予定のカフェにも、一人でも多くの方々がご来店いただけることを強く願っております。

法学部カフェ店長 樽見 弘紀

松本いづみさん



私が初めて法学部カフェを訪れたのは第1回目、札幌市長の上田文雄さんをゲストに、札幌の路面電車の未来をテーマとして考えたカフェでした。その頃は単に、法学部カフェとは何だろう、という興味だけの参加でしたが、「カフェ店長」がゼミの先生である手前、半ば成り行きのボランティアだったように思います(笑)。

法学部カフェは世界的な彫刻家である安田侃さんや、現役でバリバリ活躍されている(された)マスコミの方など、実にさまざまな分野

「法学部カフェ」 全26回一覧



話 = 話し手 / 聞 = 聞き手



第1回 法学部カフェ

「さっぽろの
路面電車の未来」

2011年6月11日

@D31 番教室

話: 上田文雄さん(札幌市長)
/ 聞: 樽見弘紀さん(法学部教授)



第2回 法学部カフェ in 美唄

「アルテピアッツァ美唄に
流れる時間とは」

2011年7月9日

@アルテピアッツァ美唄

話: 安田侃さん(彫刻家) /
聞: 田口晃さん(法学部教授)
/ 共催: NPO法人アルテピア
ッツァびばい

の方々が話をされることもあり、本学の学生や教職員のみならず、学外の一般のみなさんにもとても親しまれています。

「店員」としての私はカフェにいらした方に対する笑顔を一番大事にしています。質疑応答の際にマイクを渡すときや資料を配布するときなど、カフェご来店の方々に楽しい時間を過ごしていただけるよう環境づくりを常に一番に心がけてきたつもりです。

まだ足を運んだことのない方も、一度ご来店いただけたら、きっとカフェの魅力に引き込まれることでしょう。私はこれからもこの素敵な法学部カフェの店員として、皆様のご来店を心よりお待ちしております。

◎カフェ店長から一言

人には頼みやすい人と頼みにくい人がいます。松本さんは明らかに前者。しかし、頼んだあとの彼女はけっこうなリマス試験紙です。テーマが松本いづみの琴線を震わせた回は彼女の表情も実にイキイキしていますが、イマイチのときは挨拶もそこそこになっています(笑)。もちろん、「イマイチ」の大方は店長の進行に起因していて、毎回の素晴らしいゲストの方々になんら落ち度はありませんので悪しからず。

白鳥 健志 さん



思い起こすと、『チカホ de カフェ』の話をいただいたのが、実施の半年前の2012年12月ごろでした。「一日平均7万人の人が通行する“札幌駅前通地下歩行空間(「チ・カ・ホ」)」で『法学部カフェ』を行うことは、このカフェの趣旨に沿う最適な場所である」との熱心な説明に、私も即同感し、お引き受けしました。

この「チ・カ・ホ」で、私たちが特に力を入れているのが、“アート文化と市民生活の素敵な関係”です。美術館にわざわざ足を運ばなくても、日常の空間にアートがある、芸術に触れることが出来るというのは素晴らしいことですし、それは、芸術家の活躍する場の存在につ

ながります。私は、アート文化を創造する芸術家は、「まちの宝」だと思っていますので、そんな宝を育てる場所として、「チ・カ・ホ」は有り続けたいと思います。同じ方向性を持つ「チカホ de 法学部カフェ」の永続的な開催を心から願っています。今後も協力を得ることができれば嬉しいです。

◎カフェ店長から一言

チカホで法学部カフェが開催できる!と関係者一同小躍りして喜んだことが昨日のこのことです。はじめ白鳥さんが本学の卒業生とは知りもせず、なぜか破格の条件で(場所を貸していただいたのみならず、財政的な支援もいただきました)チカホの一等地を使わせていただけるのだらう、何か裏がある、何か裏がある…と訝ったほどです(笑)。白鳥さん、本当にお世話になりました。

第3回 法学部カフェ
「国際環境NGO
グリーンピースの挑戦:
ノンフロン冷蔵庫から
放射能監視まで」
2011年10月1日
@D31番教室
話:鈴木かずえさん(グリーン
ピース・ジャパン)/聞:本田 宏
さん(法学部教授)/演奏:中島
杏子さん(チェリスト)



第4回 法学部カフェ
「誰のため?
震災ボランティア」
2011年10月15日
@カフェ・エストラダ
話:秋元智絵さん(法学部生)、
田中恵理華さん(法学部生)、
南 琢磨さん(法学部生)/聞:
木寺 元さん(法学部准教授)

第5回 法学部カフェ
「〈トモダチ作戦〉とは
何だったのか」
2011年11月19日
@D31番教室&
カフェ・エストラダ
話:ジョン・テイラーさん(在札
幌米国領事館領事)/聞:上野
之江さん(法学部教授)



第6回 法学部カフェ
「〈人生〉が一つの
〈ゲーム〉であるという
可能性を真剣に
考えてみる:
ゲームのメタフィジクス
序説(の序説)」
2011年12月10日
@カフェ・エストラダ
話:川谷茂樹さん(法学部教
授)/聞:菅原寧格さん(法
学部准教授)、泉谷琢磨さん(法
学部生)



第7回 法学部カフェ
「英語で議論してみる
貧困問題:ネパールの
子供たちに学校を
つくるということ」
2011年12月19日
@カフェ・エストラダ
話:ディリッパ・ピーケー・シュ
ナルさん(つばみ学校ボカラ)
/聞:滝口香織さん(NPO法
人さっぽろ自由学校「遊」)、樽
見弘紀さん(法学部教授)/共
催:さっぽろ自由学校「遊」

第8回 法学部カフェ in 旭川
「すぐに始められる・
ずっと続けられるNPO」
2012年4月21日
@旭川市民活動交流センタ
ー CoCoDe
話:樽見弘紀さん(法学部教
授)/聞:森田裕子さん(旭川
NPOサポートセンター事務局長)
/共催:旭川NPOサポートセ
ンター



第9回 法学部カフェ
「チカホde真剣に
議論してみる
札幌の芸術家支援」
2012年5月19日
@札幌駅前通地下歩行空間
話:柴田 尚さん(NPO法人S-AIR
代表)、千葉華月さん(法
学部教授)/聞:斎藤ちずさん
(NPO法人コンカリーニョ理事
長)、扇柳トールさん(ロケット
姉妹)/演奏:ロケット姉妹/
共催:札幌駅前通まちづくり
会社



第10回 法学部×
法科大学院カフェ
「プロボノ弁護士
倍增計画」
2012年6月4日 @60番教室
話:中村誠也さん(弁護士・法
科大学院教授)/聞:上田文
雄さん(弁護士・札幌市長)、上
田絵理さん(弁護士)、浅野高
宏さん(弁護士・法学部准教授)



法学部カフェの 影武者たち

——全26回の軌跡——

蝶野 岳陽 さん 路子 さん 夫妻



その日、先生は画家に描いてもらったという
素敵な絵画を小脇に抱えやって来ました。その
絵画を看板にして入口の壁に掲げると、エス
トラードは“法学部カフェ”に早変わり。その日
以来、エストラードは時々この“法学部カフェ”
に変わり、いつも大盛況の店内。毎回様々な
分野の内容で、私たちも一緒になってドキドキ
ワクワクさせていただきました。あれからやがて
3年。何事も、始める事はできても、続けてい
くことはとても難しいです。こんな風に私たちも、
永く永くみなさんから愛されるお店を作り続けたい。
そんなことを、改めて思わせてくれた“法
学部カフェ”でした。

◎カフェ店長から一言

蝶野さんご夫妻のカフェは、いつうかがって
も温かいし居心地最高です。「法学部カフェ」
構想の一番最初に、蝶野さんご夫妻の（リア
ルな）カフェのイメージがあった、といっても過
言ではありません。理想の「キャンパス」とは、
そんな大学周辺の文化的なインフラも含めての
事なのだ、と信じて疑いません。

吉田キミコ さん



第11回 法学部カフェ
「フランス人と話せば
フランスが見える」
2012年6月23日
@カフェ・エストラード
話:レベール・レジスさん(法学
部非常勤講師)／聞:中村寿
司さん(法学部教授)



第14回 法学部カフェ in 北見
「子どもの心が
見えていますか。」
2012年10月12日
@北海学園北見校地
3号館1階ホール
話:後藤聡さん(法学部教授)
／聞:かしわばらかつあきさん
(児童文学者)／共催:北見市



第16回 法学部カフェ
「いまソ連の話をしよう」
2012年11月14日
@D20番教室
話:松戸清裕さん(法学部教
授)／聞:今川かおるさん(札
幌市職員)、神原 勝さん(法学
部教授)、木寺 元さん(法学部
准教授)



第12回 法学部×
工学部カフェ
「七夕に想う宇宙」
2012年7月7日
@カフェ・エストラード
話:岡崎教男さん(工学部教
授)／聞:藤田正さん(法学部
教授)／共催:工学部



第17回 法学部カフェ
「マスコミへの
はるかな道」
2012年11月17日
@34番教室
話:小林 悠さん(TBSアナウ
ンサー)／聞:木寺 元さん(法学
部准教授)

法学部特別講演会
「イギリスの大学教育と
学生生活」
第13回 法学部カフェ
「英語で質問してみる
イギリス」
2012年10月1日
@60番教室&
カフェ・エストラード
話:アラン・マクファーレンさん
(ケンブリッジ大学名誉教授)／
聞:中村敏子さん(法学部教授)



第15回 法学部カフェ
「スタジオジブリの
もう一つの仕事:
ジブリ美術館が
できるまで」
2012年10月20日
@D20番教室
話:中島清文さん(三鷹の森
ジブリ美術館館長)／聞:浅野
高宏さん(法学部准教授)／協
力:スタジオジブリ、三鷹の森
ジブリ美術館

第18回 法学部カフェ
「神原勝先生×
山本佐門先生最終討論
〈僕たちが教えて
きたこと、学んだこと〉」
2013年1月16日 @ D20番教室
話:神原 勝さん(法学部教授)／
山本佐門さん(法学部教授)／
聞:木寺 元さん(法学部准教
授)、若月秀和さん(法学部教
授)／演奏:室内弦楽団 カム
学園／共催:ゆうほう会(法学
部同窓会)



空間に思いを募らせたのはパリのカフェだった。あのエコールドパリの時代にサルトルやヴォボワールをはじめ集い語った人達の文化は、まだこの街（吉祥寺）に息づいている。カフェと絵と人があり、そこで語り、お茶を飲む時間こそ物語の世界を空想出来るのではないかと思う。森の中のカフェに風を流し演出できたら夢をいつまでも語れるだろうかと、そんな「カフェ」のステージに人が集い続けるのを心から願っている。

◎カフェ店長から一言

東京・井の頭公園駅前のカフェ「宵待ち草」をはじめ訪ねたのは僕がまだ大学生だった頃でした。数年前、ひとつづてにその名店が閉店すると聞きつけ、駆けつけて壁にかかる50号超の油絵の大作「豚を抱く不思議の国のアリス」を迷うことなくいただいた。その店の店主こそが描き手である吉田キミコさんであることを始めて知った瞬間でした。その延長線上に吉田さんには法学部カフェの看板も描いていただいた。あの絵がなかったら、法学部カフェのイメージを人々に説明することがどんなに難しかったことだろう、と今に思います。

伊藤也寸志 さん



「法学部カフェ」に関わらせていただいたのは、私が転職で東京より戻ってきて間もない頃、「第1回」に偶然、聴衆の一人として参加したことがきっかけでした。その際「カフェ店長」よりチャンスをいただき、その後の撮影を一手に担当させていただく事となりました。大学内での撮影の他に、アルテピアッツァ美瑛や北海学園北見校地、もしくは実際の「カフェ」など、

教室を離れたところでも、様々な分野の「知の現場」を目撃することができたのは、印象深い事柄でした。

会場の様子や話し手やお客さんの表情など、常に気をつけるべきポイントは多くて、それを考えながら撮り続けるわけですが、撮っている間に聞こえてくるお話も興味深く、自分でもあれこれ考えながら、その五感をフルに使う現場でした。お話の他、時折音楽が聞こえてくるのも「法学部カフェ」の特色です。そんな音や声は聞こえてこない写真ではありますが、こういった面も伝わればと思いながら撮り続けております。

あと、小さな悩みとしては人によって「目つぶりが多く写ってしまうことでしょうか。

まばたきの時間の長さを、期せずしてシャッタースピードから知るようになりました。

◎カフェ店長から一言

伊藤君はカメラマンというよりは作家と呼ぶに相応しい魂とプロ意識をもった写真家です。伊藤君のような「作家」が写真だけで喰えるような日本、否、札幌になれば…といつも願っています。

第19回 法学部×経済学部カフェ

「若者の貧困とテレビ報道」

2013年5月20日 @50番教室
話:水島宏明さん(法政大学社会学部教授)／聞:川村雅則さん(経済学部准教授)、本田宏さん(法学部教授)／共催:経済学部



第21回 法学部カフェ in 釧路

「役所の若者人材をもっと活かす！」

2013年7月6日
@釧路フィッシャーマンズワーフEGG
話:佐藤克廣さん(法学部教授)／聞:蝦名大也さん(釧路市長)／共催:釧路市



第24回 法学部カフェ

「なぜ僕らは外国語会話が苦手なのか」

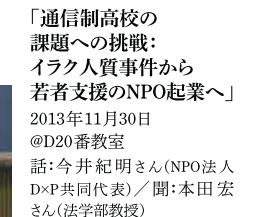
2013年11月9日
@D20番教室
話:岩本和久さん(稚内北星学園大学情報メディア学部教授)／聞:松戸清裕さん(法学部教授)



第25回 法学部カフェ

「通信制高校の課題への挑戦:イラク人質事件から若者支援のNPO起業へ」

2013年11月30日
@D20番教室
話:今井紀明さん(NPO法人D×P共同代表)／聞:本田宏さん(法学部教授)



第20回 法学部カフェ

「ソーシャルイノベーションをデザインする:〈ワークショップ〉の極意、伝授します!」

2013年6月15日 @AV4教室
話:保井俊之さん(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特別招聘教授)／聞:樽見弘紀さん(法学部教授)



第23回 法学部カフェ

「震災と民法」

2013年10月19日
@D20番教室
話:河上正二さん(東京大学大学院法学政治学研究科教授)／聞:内山敏和さん(法学部准教授)、石月真樹さん(法学部講師)



第22回 法学部カフェ

「中国の市民社会」

2013年10月5日
@D20番教室
話:李妍焱さん(駒澤大学人文学部准教授)／聞:高木晴光さん(NPO法人ねおす代表)、田口晃さん(法学部教授)



第26回 法学部カフェ

「市民が守る平和」

2013年12月14日
@D20番教室
話:目加田説子さん(中央大学総合政策学部教授)／聞:秋葉忠利さん(前広島市長)、本田宏さん(法学部教授)／進行:樽見弘紀さん(法学部教授)



法学部カフェの 影武者たち

——全26回の軌跡——

坂井 洋介 さん



カフェ店長と打ち合わせ中の坂井さん(左)

釧路市内の屋内植物園にて「若者人材を活かす!」というテーマのもと、法学部カフェ in 釧路が開催された。学生時代から、わが故郷釧路で開催したいと考えていた私にとって、特別な回になった。釧路開催が決まったのは、同窓会での雑談の中で樽見先生に「是非釧路で」と申し出たこと、そしてそれに快諾いただいたことによる。そこからつてをたどって市長まで話が届け、釧路市 × 北海学園大学の当イベント開催に至ったのである。

市長は、学生時代インターンシップでお世話していただき、釧路市職員を目指すきっかけを与えてくれた恩師である。樽見先生は、ゼミ活動の内外でお世話いただき、進路相談の際、私に後押しの言葉をくれた恩師である。いわば

自分にとっての恩師同士を引き合わせることができ、そのきっかけが自分ということ、そしてその場が釧路市ということで、運命的な何かを感じざるを得なかった。

◎カフェ店長から一言

坂井君は何代か前の僕のゼミのゼミ長ですが、彼のコーディネータとしての才能と人柄は出色です。それが証拠に彼の代のゼミの新年会は未だ途切れることはありません。いまはfacebook や LINE でいつでも誰とでも繋がれる時代。しかし、ここ一番のとき、釧路から馳せ参じてくれる坂井君のような「カフェ武者」の存在が何よりも有り難い得難いのです。

三浦 裕幸 さん



出演者を囲んで懇親会中の三浦さん(右端)

4月から法学部に配属となった私から見た「法学部カフェ」は、ただただ「凄い!」の一言でした。著名な方々を本学にお呼びできる店長や先生方がとにかく凄い。しかも謝礼といえば僅かばかり。先生方が築いてこられた人間関係があってこそ26回も実施できたのではないのでしょうか。事務方の貢献度は実にささやかなもので、スムーズに「法学部カフェ」が実施されるよう会場の準備、講師の旅費や謝金の計算、ポスターの印刷くらい。それでも法学部の一人として、「法学部カフェ」開催を通して学内外に「北海学園大学法学部」を知ってもらうことに、微かながら協力させていただいたと思っています。

◎カフェ店長から一言

三浦さんの凄いところは、どんな役回りも笑顔で演技きってくれるところ。法学部カフェの企画立案や実施は、たぶんアドホックというか、出たとこ勝負のところがあります。そのたびにお金の問題やロジスティックスの問題等課題山積。その都度、三浦さんがテキパキと問題解決に尽力してくださいました。ただ一つ解せないのは、しかし、そんな三浦さんがいまをもって独身であるということ。夫にすれば、雪はねもゴミ出しもどんな辛い仕事も笑顔でノリノリでやってくれると思うのですが……。

記念すべき第30号を、法学部広報の刷新に尽力された木寺元法学部広報戦略委員会チーフ(2014年4月明治大学に転出)に捧げます。 法学部報編集委員一同